



#34

すこしの間で、いいんです

著: 藍澤たすく

イラスト: かもめ遊羽

「きみ、頼む！ これをしばらくの間、預かってくれないか……!?」
下校中、黒づくめの男にいきなりそう言われて、和賀広務は戸惑った。

「頼む！ 本当に少しの間でいいんだ！ ……いかん、やつらが来る！ じゃ、頼んだぞ！」
男は広務に押しつけるように黒い小箱を渡すと、そのまま脱兎のごとく走り去った。

広務は小箱を持ったまましばらくほんやりと立っていたが、やがてゆっくりとそれを学生靴の中に入れてしまった。

「おい、お前！ ここに黒づくめの男が来なかったか!？」

今度は白づくめの男たちが広務の許に駆け寄ってきた。

「……………」

広務は無言で男が走り去った方向を指差した。

「あっちか！ おい、お前ら、行くぞ！」

白づくめの男たちも、これまた脱兎のごとく走り去っていった。

「……………」

広務は学生靴から先ほどの小箱を取り出した。

蓋も鍵も何もない。つるつるだ。どこから開けるのかすら判らない。

そもそもこれは小箱なのだろうか？ 単なる立方体の積み木ではないのか？

広務はしばらく小箱を眺めていたが、やがて小さくため息をついて、またゆっくりとそれを

学生靴にしまい込んだ。



「お願いです……この剣を……預かってもらえませんか……？」
角を曲がったところにお姫様が倒れていた。

お姫様は息も絶え絶えに広務に懇願してくる。

中世ヨーロッパ風とでも言えばよいのだろうか。

豪華なドレスは、しかし砂にまみれ、あちこちが破れていた。

よく見ると胸の辺りには赤い血の跡が広がっている。

「あの……怪我して……」

「お願いです、あたしが消えてしまいう前に……早く、これを……」

お姫様は鈍色に光る剣を広務に差し出してくる。

その腕はすでに半透明になり、陽炎のようにゆらゆらと揺れていた。

「……………」

広務は頷いて恭しく剣を受け取った。

「あり……がとう……」

お姫様は安堵の表情を浮かべ、そのまま静かに消えていった。

「出しなさい！」

家の前までたどり着いた広務に鋭いソプラノの声がかかった。

振り返ると赤毛の少女が広務を睥睨するように仁王立ちしている。

「預かってきた物があるでしょう？ おとなしくそこに出しなさい」

少女は有無をいわさぬ勢いで広務に命令した。

広務は少しの間、逡巡していたが、やがて少女の前にそっと先ほどの剣を置いた。

「まだあるでしょう？ さっさと出しなさい！」

少女の命令に、広務は学生鞄から小箱を取り出した。

続いて、指輪、仮面、宝玉、首飾りを地面に置いた。

先ほどのお姫様のあとも、広務は様々な人からいろんな物を預けられていたのだ。

「6個ね……」

少女は難しい顔をして、ふむ、と頷いた。

「あたしも6個だから今日は引き分けね！」

「え、愛美姉ちゃんも6個なの？」

「何よー、疑うのー？」

少女は頬を膨らませて、自身の学生鞄から宝石、金色の彫像、ダイヤが埋め込まれた魔法杖などなどを取り出して地面に並べた。

確かにその数は6個だった。

「うーん、今日は『預けて預けてオーラ』が絶好調で出てたと思うんだけどなあ〜引き分けかあ〜」

「僕は『通りすがりの、物を預けやすいモブキャラ感』をいい感じで出してたと思うんだけどなあ〜」

「じゃ、今週の掃除当番はあんたね」

「え!? なんだだよ、姉ちゃん!? 引き分けだから公平にジャンケンで決めようよ〜」

「同じ6個でもあたしの方が高い物ばかりだから、実質勝ちみたいなんですよ〜！」

「そんなの横暴だよ〜……」

「あの、匿ってもらえませんか!?」

突然二人の背後から聞き覚えのない少女の声が響いた。

振り返ると不思議な衣裳に身を包んだ少女が息を切らせながら立っていた。

ファンタジー系のMMORPGに登場する魔法使いのような格好だった。

「悪い人に追われてるんです！ 少しの間でいいから匿ってもらえませんか!？」

「どっちに!？」

「……はあ……?？」

広務と愛美が異口同音いくどうおんに発した問いかけに、少女はぼかんとした表情になった。

「あの……どちらでも……匿かくっていただければ……いいんですけど……?？」

「それじゃ勝負しょうぶがつかないでしょ!! どっちに匿かくって欲しいか、はっきりして頂戴!

「そうです！ そうじゃないと困こまるんです！」

「なんせ今週一週間の重労働そうじがかかってるんだからね！」

「ですからね！」

「さあ、早く！」

「そうです、早く！」

「どっちに匿かくりたいかはつきりして！」

詰問きつもんされる少女はどう応こたえていいのか判わからず、ただおろおろするばかりだった……。

おしまい